様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　６ 年　　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ００４９８

研究課題名（和文）文化実践の多元性と境界の変容・融合に関する研究　－文化的オムニボアとは何かー

研究課題名（英文）What is Cultural Omnivore? : A Study on the Plurality of Cultural Practices and the Transformation of Boundaries between Genres

研究代表者
片岡　栄美（Kataoka, Emi）

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：００１７７３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：文化実践や趣味テイストの文化的格差を解明する複数の調査を実施した。現代の文化の多元化は文化的オムニボア（雑食）の増大で文化格差を見えなくしてきた。文化オムニボアに関する世界的研究動向を整理した結果、3種類の異なる文化雑食者の可能性が明らかにされた。また量的調査を実施し、高尚な文化資本保持者は中高年中心で、知識重視型の新興文化資本は若者を中心に増加していた。文化威信スコアの測定調査を行ない、その評価基準も解明した。Twitterのビッグデータ解析により、この情報空間が趣味のネットワークが主流だと解明された。量的調査とインタビューから文化的境界感覚の実態や体育会系ハビトゥスの特徴も解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文化的オムニボア（文化的雑食）の社会的位置やそのハビトゥス、性向の解明は世界中で研究されてきたが複数の見解があり複雑化していた。これを理論的に整理しオムニボアの異なる3つのタイプの可能性を明確化できた。また文化評価調査から文化威信スコアの結果を得て過去の結果との変容を解明、また文化評価基準を初めて調査できた。文化実践の全国調査では、ハビトゥスに関する意識項目も調査し、新興文化資本の特徴を量的データで初めて把握できた。またSNS（Twitter）の情報空間全体をビッグデータ解析し意味を解読することで、この情報空間が趣味を中心としたネットワーク空間であることが世界で始めて明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：We have accumulated analyses that elucidate cultural disparities through hierarchical differences in cultural practices and tastes. Contemporary cultural pluralism has obscured cultural disparities with the increase of cultural omnivores. We have summarized global research trends on cultural omnivorousness and identified three different types of possible cultural omnivores. Quantitative research were also conducted, and found that the holders of lofty cultural capital were mainly middle-aged and older, while the knowledge-oriented emerging cultural capital was increasing, especially among young people. The big data analysis of Twitter revealed for the first time in the world that this information space is dominated by a network of hobbies in Japan. From interview data, we also elucidated the mechanism of cultural capital formation and the characteristics of athletic habitus.

研究分野：文化社会学

キーワード：文化的オムニボア　文化実践　新興文化資本　ハビトゥス　文化威信スコア　社会階層　Twitter　ビッグデータ解析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代では芸術文化実践に関して、ジャンルを超えた新しい文化の形式が生まれ、「形式の融合」や「異種コンテンツ」の協働も広がってきた。またデジタル化の進展により、商業主義的なポピュラー文化の多様なコンテンツは、SNS や YouTube、サブスクリプションを媒介にアクセスも容易になり広く浸透してきた。デジタル化とグローバル化の変化の中で、人々の好み（テイスト）やその美学的基準を知るには、単にジャンルの好みとジャンル別の文化実践を調べるだけでは把握できなくなってきた。また社会階層と文化の序列性の対応関係は、ブルデューが 1960 年代にフランスで示したような「趣味は階級を刻印する」といった文化的排他性仮説による対応関係ではなく、ハイカルチャーも大衆文化もという文化的雑食（文化的オムニボア）が増えてきたことが 1995 年調査で確認できている（片岡　1998,2000）。その後、ジャンル間の境界の相互浸透や融解がどのように進行し、文化的オムニボア率がどう変化したかを検証する必要がある。また文化的オムニボアをめぐる知見が世界で複雑化して多様な見解が提示されているので、それらの論点を整理し、理論的、実証的に検討する必要があった。その中から文化的オムニボアと現代の新しい文化資本（新興文化資本）およびそのハビトゥスを解明するという課題がある。

２．研究の目的

第１に、人々の文化実践や文化評価がどう変化してきたかを解明する。異なる階層文化間を縦断する文化的オムニボア（文化的雑食）が増加してきたのか。第 2 に、知識経済の進展の中で、高尚な文化資本の持ち主がさらに減少していくのかを見極め、Savage らがいう現代の「新興文化資本」の特徴とその担い手のハビトゥスを明らかにする。第 3 に、それに伴って文化による卓越化の戦略や文化実践の評価がどう変化してきたかを明らかにする。伝統的な文化的権威の衰退の中で、文化的オムニボアと伝統的な芸術文化やポピュラーカルチャーの関係、さらには文化による卓越化戦略や象徴闘争の実態を、調査により明らかにする。第 4 に、SNS 上でのネットワークの情報空間が、文化や趣味に関するものが多いのか、それとも政治的言説やジャーナリズム的な空間となっているかを、Twitter のビッグデータ解析を通じて世界でも初めての試みとして解明する。第 5 に、文化実践やハビトゥスに関する質問紙調査とインタビュー調査を組み合わせた混合的研究法により、現代日本におけるディスタンクシオン（差異化、卓越化）の実態とその社会的意味を解明する。

３．研究の方法

第 1 に、理論研究として、文化的オムニボアとは何かに関する最新の世界的研究動向を整理検討し、論文として報告した。第 2 に、現代における文化の卓越性の基準が何であるのか、文化評価調査を 2 回実施し、文化威信スコアやその社会的構成を解明する。第 3 に、社会空間における文化による卓越化の実態を明らかにするために、現代の文化資本の特徴を明らかにする質問紙調査を Web 調査で実施した（2023 年 3 月）。第 4 に、Web 調査でのサンプルから希望者を対象に社会的地位と文化履歴に関する詳細なインタビュー調査を 40 名抽出して実施し、現代の文化資本とその形成についての質的データを得た。第 5 に、過去に実施した全国大学生調査を再分析し、量的調査と質的調査による混合的研究法でハビトゥスを解明する。第 6 に、大学生や若者の文化的象徴闘争に関するインタビューを実施し、量的データ分析を補完した。第 7 に、大学生の体育会系ハビトゥスとスポーツ実践者の文化的特徴を明らかにするために、10 名の大学生にインタビュー調査を実施した。第 7 に、音楽ＣＤを購入するコアファンを中心としたインターネットによる質問紙調査を 500 名に実施した。第 8 に、Twitter（現在のＸ）の 2020 年 6 月分のビッグ・データをもちいてネットワーク解析を行なった。第 9 に、文化の世代間再生産や文化資本の

伝達に関する子ども期の情報を Web 調査により首都圏母親調査（2024 年 3 月）を実施した。

４．研究成果

（1）理論的研究での貢献：ブルデューとポスト・ブルデューの文化社会学を中心に、趣味（テイスト）の社会学に関する内外の研究動向を整理し、社会学評論に分野別研究動向として発表した（片岡 2024）。また文化的オムニボアに関する研究動向を教育社会学研究に掲載し（片岡 2023），村井（2023）も新しい文化資本についての理論的動向を整理した論文を公表した。

（2）文化威信スコアの最新版と評価基準の解明：文化評価調査をサンプル構成の関係で追加調査によって 2 回実施し、文化威信スコアを測定した。またその評価基準についても明らかにした（分析中）。

（3）Web 調査による質問紙調査（2023 年 3 月）の結果から、さまざまな文化実践によって構成される差異の空間を多重対応分析で構成し、社会的地位変数との対応を検討すると、文化実践のヒエラルキーは社会的地位変数の収入や学歴を中心に社会的ヒエラルキーと対応するが、その対応関係は経済資本と学歴資本の両方をもつ人々と層でない人々とに分化する傾向が見いだされ、経済資本と学歴資本、年齢コホート、ジェンダーによって文化参加と非参加、高尚な文化とそうでない文化の分断が起き始めていることがわかった。1995 年ＳＳＭ調査でも高い年齢とジェンダー（女性であること）、経済資本や学歴資本は高尚な文化資本と強い関連をもっていたが、それらの効果を維持しつつも現代の社会空間は経済も学歴も「全てを持つ」人々が高尚な文化資本を領有する方向になっており、経済資本と学歴資本の交差配列は生じていないことも明らかとなった。

（4）Web 質問紙調査とそのサンプルへのインタビュー調査から、高尚な文化資本保持者と新しい文化資本の保持者の特徴を明らかにしている。後者は、知識量を高めることに熱意をもち、多様なジャンルに関する幅広いテイストや文化的知識を持っている。これらは若い世代から中年層を中心として、職種としても専門職や中間的な職業階層の人々の間に見られやすい。そのハビトゥスと意識が明らかにされた。

（5）2018 年実施の大学生全国調査を再分析した結果、若者の趣味の良さ判断と文化実践との対応関係だけでなく、大学生集団の中での複数の次元からなる地位判断と文化実践が対応し、複数のフラクション（部分集団）に趣味群としても分かれて現われることが明らかになった。若者の趣味判断は社会人とは大きく異なり、ヒップホップやラップ、レゲエなどを愛好する者の卓越化が顕著で、地位の卓越化とも符号していた。またそれらが将来の職種への志向とも対応して、大学生文化の内部構造と大学生の進路嗜好（職業テイスト）との関連が明らかにできた（片岡　2023, 2024、4 章）。

（6）上記（5）を関連して、若者の趣味テイストによる象徴闘争が具体的にどのような言説として現われるかを、インタビュー調査で明らかにできた（一部発表）。

（7）Twitter（現在のＸ）の 2020 年 6 月データのリツイート・ネットワークからなるコミュニティ 1772 のビッグデータ解析を行ない、Twitter 上では、音楽、アニメ・マンガ、ゲームなどで情報交換する趣味のためのネットワークになっており、政治的文脈やジャーナリズムの情報空間は周辺的であることを明らかにした（片岡ほか 7 名　2023）。

（8）首都圏母親調査（2023 年 3 月実施）データから、学校体育スポーツ学会でのワークショップでは「子どものスポーツ参加と社会階層」の問題について報告した。学校外でのスポーツ体験の社会格差は、武道系以外のすべてのスポーツジャンルで生じており、学校部活動の地域移行に

よってこれらの子ども達のスポーツ参加体験がさらに社会的に分断され、豊かで高学歴の親をもつ家庭の子どもには有利だがそうではない家庭の子どもの不利益が増大する可能性を指摘した。

（9）スポーツ実践のデータ等を用いて、スポーツ社会学会 2024 年 3 月のシンポジウムでのスポーツ界における男性支配とハビトゥスの問題について報告した（2024 年論文近刊）。

（10）趣味に関する文化の境界感覚や文化による卓越化の問題について、2023 年量的調査データとインタビュー調査データを接合して検討し、いくつかの新しい知見を得た（公表前のため詳細は省略）。

（11）日英合同のワークショップ（文化参加の日英調査研究）に片岡が参加し、コメントを行なった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 片岡　栄美	４．巻 74 (2)
２．論文標題 分野別研究動向（趣味〔テイスト〕の社会学)ーーブルデューからポスト・ブルデューの文化社会学を中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 社会学評論	６．最初と最後の頁 332－346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 片岡　栄美	４．巻 61
２．論文標題 若者たちの趣味判断と趣味の差異空間ーーACG趣味、アイドル趣味、ヒップホップ系および正統趣味の関係性	５．発行年 2023年
３．雑誌名 駒澤社会学研究	６．最初と最後の頁 33－58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 片岡 栄美 ,　瀧川 裕貴 ,　南田 勝也 ,　村井 重樹 ,　小股 遼 ,　鳥海 不二夫 ,　榊 剛史	４．巻 81
２．論文標題 Twitterでは何が語られているのか ーSNSの情報空間を俯瞰するー	５．発行年 2024年
３．雑誌名 駒澤大学文学部研究紀要	６．最初と最後の頁 41－77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 片岡　栄美	４．巻 786
２．論文標題 「文化と意識に関する全国調査」(2019年)にみる文化消費とライフスタイルの社会的特性 : 日本の高地位者は文化的雑食か?	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中央調査報	６．最初と最後の頁 6887－6893
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 瀧川　裕貴・藤原　翔	4．巻 31
2．論文標題 社会学方法論と機械学習	5．発行年 2023年
3．雑誌名 社会と調査	6．最初と最後の頁 5－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 片岡栄美	4．巻 110
2．論文標題 文化的オムニボアとハビトゥス、文化資本	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育社会学研究	6．最初と最後の頁 137-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 片岡栄美	4．巻 59
2．論文標題 人々が期待する文化振興策のジャンル間比較　ー全国調査データを中心にー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 駒澤社会学研究	6．最初と最後の頁 29-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村井重樹	4．巻 93
2．論文標題 文化資本概念の現代的課題　ー新興文化資本をめぐってー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川崎賢一	４．巻 31
２．論文標題 グローバル化と新しい文化階層	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Global Media Studies,Komazawa University	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片岡　栄美	４．巻 110
２．論文標題 文化的オムニボアとハビトゥス、文化資本	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育社会学研究	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 片岡　栄美	４．巻 57
２．論文標題 ライフスタイルとしての「場所」へのテイスト　―都市的空間と場所の階層性―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 駒澤社会学研究	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村井　重樹	４．巻 93
２．論文標題 文化資本概念の現代的展開――新興文化資本をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 南田　勝也
2．発表標題 誰がCDショップを訪れているのか
3．学会等名 日本ポピュラー音楽学会第35回大会（四国学院大学）
4．発表年 2023年

1．発表者名 片岡　栄美
2．発表標題 子どもの社会階層とスポーツ参加 －文化社会学の立場からー
3．学会等名 日本体育社会学会オンラインセミナー（第1回）（招待講演）
4．発表年 2024年

1．発表者名 片岡　栄美
2．発表標題 スポーツと体育会系ハビトゥスおよび男性間の象徴闘争
3．学会等名 日本スポーツ社会学会 研究委員会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2024年

1．発表者名 Takikawa Hiroki
2．発表標題 Macrosociological Experiments on Identity Signaling in an Online Discussion Site
3．学会等名 15th Annual Conference of the International Network of Analytical Sociologists (INAS)
4．発表年 2023年

１．発表者名 片岡　栄美
２．発表標題 学校の芸術文化教育への人々の評価と芸術文化テイスト形成に関する社会学的研究 ―学校教育効果と家庭の文化資本効果の比較を中心に―
３．学会等名 文化経済学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 片岡栄美
２．発表標題 現代の文化消費と社会階層　　ー芸術文化、スポーツ活動に関する全国調査データを中心にー（シンポジウム　東京大会が残したもの）
３．学会等名 文化経済学会＜日本＞　大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧川裕貴
２．発表標題 ソーシャルメディア上での行動は社会的差異をシグナルするか？
３．学会等名 計算社会科学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 片岡栄美
２．発表標題 討論者コメント「デジタル・ネイティブ世代の環境～つくる・のる・いきる～」
３．学会等名 日本社会学会　第95回大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧川裕貴
２．発表標題 文化資本の社会関係資本の転換メカニズムに関する架空 SNS 実験
３．学会等名 日本社会学会　第95回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 片岡　栄美
２．発表標題 若者たちの差異空間と文化的象徴闘争 ー２次元オタクと３次元アイドルオタク、正統趣味の 関係性
３．学会等名 日本社会学会　第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 南田　勝也
２．発表標題 文化のフラット化にともなう社会学研究の今日的課題(シンポジウム「文化社会学の快楽と困難――文化社会学会は可能かを問う」)
３．学会等名 日本社会学会　第94回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 片岡　栄美
２．発表標題 「シンポジウム　東京大会が残したもの」　題目未定
３．学会等名 文化経済学会<日本>（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧川　裕貴・水野　誠
２．発表標題 ソーシャルメディア上での行動は社会的差異をシグナルするか？
３．学会等名 計算社会科学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 南田　勝也ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 NextPublishing Authors Press	５．総ページ数 116
３．書名 『コロナ禍のライブをめぐる調査レポート［聴衆・観客編］』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果の一部として、編著本を編集中で、2024年秋には刊行される。 片岡栄美・村井重樹編著、『ブルデュー社会学で読み解く現代文化』晃洋書房。近刊

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村井　重樹 (Murai Shigeki) (00780230)	島根県立大学・地域政策学部・准教授 (25201)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	瀧川　裕貴 (Takikawa Hiroki) (60456340)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	南田　勝也 (Minamida Katsuya) (30412109)	武蔵大学・社会学部・教授 (32677)	
研究分担者	川崎　賢一 (Kawasaki Ken'ichi) (20142193)	駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授 (32617)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小股　遼 (Omata Ryo)	明星大学・人文学部・非常勤講師	
研究協力者	齋藤　僚介 (Saito Ryosuke)	大阪大学・人間科学部・助教	
研究協力者	石黒　万里子 (Ishiguro Mariko)	東京成徳大学・子ども学部・教授	
研究協力者	小玉　亮子 (Kodama Ryoko)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関